

2022.11.26

## 2022 年度 ATFJ 研究会

『シリーズ: デジタル化と人間・社会の変容』をふりかえって

田中 直

今日、デジタル化が、社会に進歩と革新をもたらす経済を発展させるもの、したがって、それに乗り遅れてはいけないものとして進められようとしている。しかし、それが人間の能力、人格形成、人間関係等にどのような影響を及ぼし、総じて人間とその社会を本当に豊かにするものなのかどうかは明らかでないので、今年の研究会では、光の面だけでなく影の面も含めてデジタル化と人間・社会の変容の全体像にせまり、それにいかに向き合うかを考えようとした。以下は、今年の研究会をふりかえっての、私としてのまとめと感想である。

### 1. デジタル化の潮流のあらわれる歴史的文脈

第1回(7月30日)は、見田宗介『現代社会の理論』をテキストとして、今日のデジタル化の潮流を、大きな歴史的文脈の中で位置づけようとした。

資本主義は、利潤の拡大と経済の成長をどこまでも追い求めるシステムであるが、戦前までの資本主義の限界と基本的矛盾は、強迫的に拡大しつづける生産力が、市場(需要)の有限性の前に周期的に破綻するほかはなく、この破綻を回避しようとするれば、軍需による「最終需要」の創出にまつ他はないことであった。

一方、戦後の資本主義は、デザインと広告(これらは、〈情報化〉の二つの様相)により、需要自体を創出することによって、必ずしも軍需に依存することなしに、決定的な恐慌を回避し繁栄を持続する形式を見出した。それが、情報化・消費化社会である。

ところが、そのような新しい形式も、いまや環境と資源の壁に突き当たっている。それは物質的な次元の成長が環境の限界に達したことに他ならないが、それでもなお成長を求め続けようとするれば、情報の分野に活路を求める以外にはない。(ここまではテキストから研究会のテーマに示唆を与える内容を、私なりに抜き出したもの)

テキストは1996年に出版されたものなので(2011年に増補版が出ているが、改訂は少ない)、インターネット、パソコン、スマホ、AIなど、情報通信技術分野の急速な技術革新が視界におさめられていないが、それらの技術革新と、上のような情報分野に活路を求める動機があいまって、今日のデジタル化の潮流があらわれていると考えられる。

## 2.人工知能、自動運転と労働・生活の変容

第2回は、8月27日(土)に、松尾豊『人工知能は人間を超えるカーディープラーニングの先にあるもの』(KADOKAWA、2015年)を、第3回は、10月1日(土)に、鶴原吉郎『EVと自動運転ークルマをどう変えるか』(岩波新書、2018年)をテキストにして開催した。

私は、デジタル化がもたらす問題は、およそ(1)失業、(2)疎外、(3)管理社会化の三つのカテゴリーに整理できると考えている。第2回、第3回は、特に失業の問題と疎外の問題に関連するところが大きい。

### 2-1)失業の問題

人間の仕事を機械に置き換えていくのは何ら新しいことではないが、今回のデジタル化では、人間の判断をとれない、適宜の融通を必要とする知的労働・事務労働・サービス労働・機械の運転・操作にまで置き換え範囲が広がっていくこと、機械の情報処理能力の高さによって、単なる置き換えではなく、人間にはできなかった解析・予測・処理までできるようになる場合があることに特徴がある。いずれにしても、それは生産の効率化ないしは最適化を推し進めるものであり、人間の労働力は節約されることになる。

まだ社会の生産力を全体として増大させ、経済を拡大する余地のある間は、自動化・機械化等により、さほど大きな失業問題が生じることはないが、環境・資源の限界や、消費の飽和等により、社会全体の生産力を増大させる余地がない状態で自動化・機械化が進むと、必要な労働力が減少し、深刻な失業問題がもたらされる心配がある。

### 2-2)疎外の問題

生産活動の自動化・機械化が行われる時、機械にできるようなことは機械にまかせて、人間は人間にしかできないことをやればよい、というのはよくいわれることである。ところが、多くの場合実際に生じるのは、専門性を要する少数の管理的労働と、多数の新たな単純労働への二極分解と、失業である。また、生産の場においても生活の場においても、人間がそれに従属する他はないような、巨大で複雑なシステムが拡大していく。人間の側は、その能力を醸成し発揮していく機会を失い、やりがいのない仕事をしかたなくやることになり、人間関係も希薄化しやすい。総じて労働と生活が意味の薄い、空虚なものとなっていく。

### 2-3)適正な技術選択となりうる場面

一方、これらの情報通信技術は、人間の身体能力の弱くなったところを補ったり、過酷な労働を代替~補佐したり、資源消費の無駄を省く、あるいは新しい美のジャンルを生み出す、といった場面では、持続可能な社会形成に役立つものとなることも考えられる。技術

が、人々にとって選択可能で(使わない選択もできる)、コントロールしやすいこと、人間の能力を伸ばしていくものであることが大事である。

### 3.管理社会化の問題

第4回は、10月29日(土)に、堤未果『デジタル・ファシズムー日本の資産と主権が消える』(NHK出版新書、2021年)をテキストとして行った。

この本が主題的に扱っているのは、上述の3つの問題の中の(3)管理社会化の問題である。すなわち、デジタル化にともなって、インターネット上の閲覧履歴、購入履歴、メール、学歴・職歴、健康状態と病歴、人脈、資産、行動履歴等を含む詳細な個人情報が、本人の意思と関係なく膨大に集められていき、その情報を握るものが強大な富と権力をもって人々を支配・操作していく、といった問題である。

それらの情報は、既にターゲティング広告などでおおっぴらに、かつ大規模に活用されており、また非合法性が強いが、選挙戦略や世論の誘導などにも利用されていると見られる。それぞれの人に好まれるような情報が選択的に流されていき、SNSが同じような考えをもつ人だけを囲い込む傾向ともあいまって、人々の考え方を偏向させ、社会を分断していくことも相当程度生じているようだ。また、情報が権力の側に利用されると、反政権的な思想・考え方を持つ人たちを特定して、その人たちを監視～拘束したりすることにもなりかねず、全体主義的な社会の構築につながっていく。

市民が、どんな情報が集められ、それがどのように使われているのかを知る権利、情報の収集や利用を拒否したり、削除すべきものの削除を要求する権利等が確立されていく必要がある。

### 4.メタバース、スマホの問題

第5回は、本日(11月26日)、岡嶋裕史『メタバースとは何かーネット上の「もう一つの世界」』(光文社新書、2022年)をテキストとし、アンデシュ・ハンセン『スマホ脳』(久山葉子訳、新潮選書、2020年)を副読本として行った。

メタバースという技術そのものは、教育・訓練やエンターテイメントや新しいジャンルのアート等として魅力的なものを生み出せる可能性があると思う。一方、自分に都合がよく、好みに合う別世界を手っ取り早くバーチャルな世界につくり出して、その中で多くの時間を過ごそうとする考え方には、私としては与しない。そのような考え方は、おそらく現実の世界が格差と疎外が広がる、生きづらい世界になっていることを背景にして生じている。その生きづらい世界のあり方をそのままにして、そこから逃れて仮想空間で生きようとし

でも、結局はさらに疎外された貧しい生き方にしかならないのではないだろうか。現状の世界の生きづらさがどのような構造から生じているかを掘り下げ、その構造を改めて、問題を根本的に解決・緩和していこうとする生き方のほうがはるかに豊かなものであると思う。

### 全般的な感想

拙著『現代適正技術論序説』でも書いたのであるが、60年代から70年代にかけて隆盛した近代科学技術批判が、80年代中盤からは次第に勢いを失っていった。その背景には、新自由主義的な経済政策の台頭や冷戦構造の崩壊があると思われるが、近代科学技術批判が影をひそめるのに合わせて、かつては活発に論じられていた疎外論も、語られることが稀になってしまった。私としては、現代のデジタル化の問題の中核的な部分は疎外論をもってしか解けないものと考えているが、疎外論が失われてしまったので、問題が表面的・平板的にしか扱われていないと感じる。また、人間には、この世界の森羅万象、生命体というものほんの一部しかわかっていないのに、あたかも多くがわかっているように考えてしまう近代科学技術がもたらす誤謬が、問題を見えにくくし、解きづらくしている。あまりにも膨大な情報が飛び交う中ではあるが、あらためて問題を根源的に考え、それをふまえて、経済・社会・技術のあり方を含む包括的な代替案<sup>(※)</sup>を提起し、実践していく必要があると思う。

(※)上記の著作の補論に、私としての代替案を素描してある。

以 上